諜報大国ロシアの成り立ちと今日的課題

恩　田　久　雄（ロシア極東大学函館校）

Ⅰ　ロシアの諜報活動 —— その暗い過去

「永くロシアの呪いとなった秘密警察の制度は、偉大な怪物・最初のツアーにして専制君主、イワン雷帝（1533－84）に始まった。（ジョン・ガンサー〈INSIDE RUSSIA TODAY〉）

宮殿に密告者があふれイワンの猜疑心を刺激した。直ちに調査を命じスパイを放つ。裁判官は君主におもねって、有罪か無罪かは事実によらずイワンの気まぐれによって決まる。（アンリ・トロワイヤ〈イワン皇帝〉）

大帝・ピョートル一世（1689－1752）は秩序確立の政治組織としてスウェーデンに範をとった。行政監督官長（オーベルフィスカル）を任命、配下に500人の「フィスカル」（スパイ）が働いた。高位者も例外とせず、国民の全てを秘密裡に監察した。密偵達は一種の割り前制度によって士気を鼓舞された。密告を奨励するやり方は、権力の濫用を招き、全く後ろ暗いところのない人間までが、密告を恐れて暮らしていた。（アンリ・トロワイヤ〈大帝ピョートル〉）

ニコライ一世（1796－1855）治下では、現行体制を疑問視すること自体を重罪とする刑法の下で秘密警察国家が出現し、デカブリストの乱（1825）を招いた。皇帝官房第三部を創設（1826－80迄存在）、私服密偵と制服憲兵の組織網を配下に持ち、初代長官ベンゲンドルフ伯（在位1826－44）は皇帝に対してのみ責任を負い、最大権力者としてプーシキンをも統制下においた。

チェーホフ（1860－1904）は作品の登場人物の性的関係の細部描写を削除させられ、家族内の争い事の調子を和らげるよう強いられた。一年間に出版される書籍総数より検閲官の数が多かった。作家の被害者としては、グリボエードフ・レールモントフ・トルストイ・ドストエフスキー達もいる。

マルクス「資本論」のロシア語訳第一巻は1872年出版、検閲官はこのトロイの馬を見抜けなかった。（ロナルド・ヒングリー〈19世紀ロシアの作家と社会〉川端香男里訳）

スターリン（1879－1953）、ベリヤ（1899－1953）時代のЧＫ－ＧＰＵ－ＫＧＢの内外各種大規模テロは、諜報活動とテロ行為の結束不可分の実行を示している。

アンドロポフ（1914－84）は、唯一人ＫＧＢを善用して国家の規律回復を図ったとして、現在も尚高評価があり、その名残りをユーリー・アンドロポフ名称赤色勲章受賞大学（現ロシア連邦諜報アカデミー）の名称に留めている。——旧名称時にプーチン大統領も卒業

過去の姿は、専制君主の地位保全を主目的とし、暴力行使による反対者排除で恐怖・不信と警戒・軽蔑の対象となり、思想統制・文学芸術作品の事前・事後検閲まで及んでいた。

Ⅱ　今日的課題

1　ロシアの情報分析誌「コメルサント・ブラースチ」（2002年12月NO.50）に、現在政官財で活躍中の元ＫＧＢ大将から大尉まで150名の現在ポストと略歴、活動の具体例の調査結果が掲載された。「諜報大国ロシア」の印象を強く与えている。一部の現在ポストは次のとおり ——

プーチン大統領（ＫＧＢ大佐）

プリマコフ商工会議所会頭・下院議員・科学アカデミー会員（ＫＧＢ長官・首相）

ステパーシン会計院議長（ＫＧＢ長官・首相）

科学アカデミー会員　４名（含プリマコフ）

連邦会議（上院）議員　８名

国家会議（下院）議員　12名

大臣・次官　15名（含イワノフ国防大臣）

知事・市長　３名

州検事総長　13名

大統領管区全権代表・主要幹部　11名

外務省・在外大使館・外交官など　36名

ジャーナリスト・マスコミ関係幹部　16名

尚、150名のＫＧＢ要員としての教育機関（16）名称が個人毎に記されている。

2　2003年のイラク戦争時に、プーチン、プリマコフを中心にサダム・フセインの亡命工作と戦争阻止に動いたが、ともに成果を収めずブッシュの武力侵攻を許した。

3　今日ＦＣＢ（ＫＧＢの後継機関）が注力中の課題は、テロ・マフィア・汚職・脱税の退治である。強いロシア再建を目指し、国際政治面の大目標として、（１）ブッシュの独断を排し、多極世界の構築、（２）北朝鮮対策（望むべくは平和裡の体制変革、やむなくばキムジョンイルの亡命促進も）、がクレムリンの胸裡に秘められて、ロシア全体の表の交渉と一体をなした諜報力が発揮されることを望みたい。盗聴・尾行・検問などで現在も不評を買っているそのインテリジェント活動の高度良質化で世界の認識を改めて欲しい。

COMMENT

兵　頭　慎　治（防衛研究所）

インテリジェンス（諜報）能力は、主権国家が国際社会において国家利益を擁護し、国家戦略を立案、遂行していくために必要不可欠な国家要素の１つであり、米国をはじめとして、主要国はこの分野を重要視している。しかしながら、日本においてはこの問題を否定的に取り扱うことが多く、学会等における研究報告も極めて少ない。かかる中、報告者は、真正面からこの問題を取り上げ、しかもロシアの歴史的な成り立ちから、現代のイラク紛争にまで話題を広げて論じた点は、高く評価されよう。

以下のようなコメント及び質問をおこなった。

第一に、なぜロシアは諜報大国足り得るのか。ロシア独自の構成要素は何か。ロシアの政治文化や風土なのか。ソ連時代に形成された権威主義体制なのか。多民族連邦国家という統治の難しさにあるのか。指導者のパーソナリティーなのか。

第二に、プーチン大統領はKGB出身者であるが、プーチン政権において、ロシアの諜報能力は向上したのか、それとも低下したのか。ロシアは、冷戦時代の超大国から、あらゆる面で普通の国になりつつあるが、将来的にロシアの諜報能力はどこまで維持されていくのか。

第三に、報告者は、2003年春のイラク戦争時、ロシアはサダム・フセインの亡命工作と戦争阻止に失敗したと評価しているが、情報の収集・分析とその情報に基づく工作活動は別ものではないのか。

いずれにせよ、本報告は大変興味深いものであり、今後のさらなる研究成果の進展を大いに期待したい。